

DX（デジタルトランスフォーメーション）の取組事例集

令和6年度
「新潟県DXモデル企業創出支援」事業

2025年3月31日

目次

はじめに

DX取組事例

CASE001 株式会社ウスタ

CASE002 株式会社バイオテックジャパン

CASE003 株式会社栗田工務店

CASE004 株式会社ことりや

CASE005 株式会社スリーピークス技研

CASE006 水島鉄工株式会社



はじめに

企業のDXを次のステージに

経営理念や事業戦略と連動したDX推進は、単なる業務効率化にとどまらず、企業の本質的な成長および地域経済の活性化に直結します。本事業は、県内中小企業を対象に、具体的な支援プログラムを通じたDX戦略の策定・実装を促進し、成功事例の横展開を目指すものです。

令和6年度新潟県では「DXモデル企業創出支援事業」として、県内のDX推進のモデル創出を実施しました。

本事例が皆様の参考になりますと幸いです。

プログラムの流れ

全4回の経営者参加型DX戦略構築プログラム実施の後、委員会型伴走支援を実施しました。

DX戦略構築プログラム
全4回

オープンイノベーション
イベント

委員会型
伴走支援

全体構想

IT企業と
の出会い

実行

☑DX戦略構築プログラム

DX推進に必要とされる「組織戦略」「事業戦略」「推進戦略」が構築されます。

☑オープンイノベーションイベント

構築した戦略を発信するとともに、IT企業との出会いを体験します。

☑委員会型伴走支援

DX戦略に基づき、DXの具体的なプロジェクトが推進されます。

※委員会型伴走支援とは？

DX推進する企業の内部に、外部のITベンダー企業を中心とした専門家を複数社設置する体制。共通の目的（DX戦略）に向けた委員会型の協議体を設けることで、「統合的」「実行的」なDX推進を実現する。

ポイント

- ✓ 経営者がDXビジョン・DX戦略を構築し、従業員を巻き込みながらDXを推進
- ✓ 外部のITベンダーを活用し、内製化に向けた人材育成の実施
- ✓ DX推進体制を構築し、継続する仕組みへ

新規事業立ち上げを起点とした、社内波及するDXの推進

これまで、DX推進の計画やスケジュールを策定していた同社。しかし、実際にDX推進を進めようとする、社内の実行力が落ちてしまうという問題に直面していました。このギャップを埋めるために、より実践的で効果的なDXが必要だと感じ、本プログラムに参加。DX推進を実行可能な形に落とし込み、社内全体での実行力強化を行っている。

Usuta
Sanjo City

DX戦略書



DX推進事例



DX戦略書

▶ <https://ndxp.jp/case-studies/6760ed44f13d12b12e3333a6>

DX推進事例

▶ <https://ndxp.jp/case-studies/67d141301554231fddb33aa6>

Transformation Points / 課題と方針

写真産業の縮小

旧来の写真館事業の市場縮小に耐えうる事業体を目指したい。これまで培ってきたコアコンピタンス、写真業の強味を活かした新規事業を立ち上げることで事業転換の一步を進める。

実行性のあるDX社内波及

デジタルを活用した新規事業を推進することで、それらの事業開発に必要なデジタルの知見や経験を社内のDX推進に展開していく。

DXビジョン

人に寄り添うDX。
人が先に立つ、人と人が先にある。
テクノロジーを活用してパーパスを
実践していく。



▶ 株式会社ウスタ

所在地

▶ 新潟県三条市須頃1-26

業種

▶ 写真業・フォトスタジオ

プロジェクト体制

▶ 戦略構築：代表取締役薄田氏

▶ 委員会型伴走支援

- ・新規事業策定チーム
代表取締役社長薄田氏
株式会社イードア 石川氏
- ・制作チーム
代表取締役社長薄田氏、社員2名
株式会社Crew 山本氏

既存の写真館の トランスフォーメーション

新規事業による 社内DXへの波及

取り組んだ内容について教えてください

本プログラムでは、DX戦略の再構築を行ったのち、「新規事業のグロース」をテーマに掲げ、プログラム後半の「委員会型伴走支援」を活用して、新規事業開発と新規事業にむけた社内体制の強化に取り組みました。「新規事業計画策定チーム」と「制作チーム」の2チーム体制を組成し活動を推進しました。

強味を活かしたから出来た ファーストカスタマーとの出会い

新規事業開発では、自社のコアコンピタンスをDX戦略にあわせて整理をし、新規事業計画書の作成、営業資料や契約書、料金体系の設計を行い、実際の顧客との商談を行いました。結果、写真業態からお付き合いいただいていたお客様から初回受注を達成しました。

自社を顧客と見立てた 育成を実施

自社WEBサイトのリニューアルをお客様むけ案件と見立て、サイト制作体制の構築を図りました。外部アドバイザーを含めた体制により担当者へのメンタリングやコーチングを行い、ブランディングの再設計や競合との差別化を進めました。結果、ゼロからのWEBサイトデザインを経験し、自社のブランド統一や差別化を実現するとともに、持続的に顧客へ価値を提供するための基盤を社内に定着させることができました。

X-DX Point

—トランスフォーメーションの為に

事業戦略

事業部ごとにパーパスを掲げて事業を運営することで迅速かつ実行力のある経営を目指す。4つの事業部は相互に協力連携することにより多様な生態系を抱える共同体のように強固で持続的な事業推進力を獲得する。

実行されるDXのために新規事業を起点

新規事業立ち上げ経験を社内展開

担当者を「DXレンジャー」とし社内DX事例を増やす

組織戦略

組織内外で相互にスキルやノウハウを学び合うことにより、自律イノベーション型の組織体制に変革する。「DXレンジャー*」が事業部を横断的に行き来しDXやAI活用のノウハウを開発、提供する役割を担う。

*DXレンジャー：ウスタ社が新設した社内DX推進者

DX推進の環境整備と組織づくり、
スキルの学び合いにより一人ひとりが自律して活躍・成長するクリエイターカンパニーになる。



<https://www.usuta.jp/>

「DXレンジャー」が、飛躍の一步に

Xから考える意味

DX推進の「実行」に重きを置き、当初は新たに立ち上げられた「企業・地域プロモーション事業部」の推進に取り組むことを目指していました。しかし、このプログラムを通じて、DX推進におけるアプローチの違いに大きな気づきを得ました。特に、新規事業の事例を他の事業にどのように拡張できるかという点で再考でき、新たな視点を得ることができました。

また、言葉や概念だけにとどまらず、実際に取り組みを実施することで、大きな絵としてのDXから、個別のDXへのアプローチが可能となりました。このプロセスを通じて、社長だけでなく社員全員が実務で学び、具体的な成果に結びつけることができたと感じています。実際の取り組みを通じて、DXの重要性と実行可能性がより明確に理解できました。

本事業での成果物や過程

(A) 制作体制 (B) 新規事業立ち上げに必要なフローの構築、実顧客との折衝・商談と並行して実施し、PDT期間内の受注達成。当社のコアコンタクトを起点とした期待値をいかにできる受注となり、今後の当事業におけるモデルとなる状態への期待が実現した。



Message

業態変革を恐れず進む

過去の経験から変革の必要性を感じている方にとって、DXは次の一步を踏み出す大きなチャンスです。新しい働き方や次世代への備えを考える今こそ、現場の力と技術をつなげるタイミングです。たとえば、写真館業界がデジタル化を乗り越えてきたように、これまでの知見を活かすことで、DXはさらに実りあるものになります。

代表取締役社長
薄田 和輝 様



事業統括者からのコメント

同社は、地域に根付いた企業として地元から長く愛された写真館でした。親子3代を超えて、学校、会社、プライベート、あらゆる接点で街の景色と笑顔を写真で切り取り物語へ転換する力をもっています。この強さをデジタル時代の事業に一步を踏み出す勇気を是非引き続き応援・ご参考ください！

課題の抽出から対策の自走化 ～成功事例の創出～

Biotech JAPAN —
— Agano City

DX戦略書



DX推進事例



DX戦略書

▶ <https://ndxp.jp/case-studies/67518a1063b5e846426dcef9>

DX推進事例

▶ <https://ndxp.jp/case-studies/67d12a7a023c10c3a3715689>

これまで、デジタルツールを導入し、DX推進していた同社。DX推進において、「現場主導でないと変わらない」と考えており、現場のデジタル化を進めたいと思い、本プログラムへ参加。経営者だけではなく、従業員を巻き込んでDX推進し、現場主導での成功事例の創出に向けた活動を行った。

Transformation Points / 課題と方針

現場起点の全社DXと業務改革の実践

1部門の改善ではなく、複数の部門での課題を抽出し合理化していき、適切なデジタルツールを導入し、現場が主導し主体的な推進していく。

外部環境への適応とニーズの把握

外部環境の変化に適応し、変化をチャンスに変える。部署の垣根を超えた組織体制の構築に取り組む。

DXビジョン

デジタル化を通じて BTJファンと喜びを 分かち合う

BTJファン＝バイオテックジャパンの社員、顧客、サプライヤー等、企業に関わる人



▶ 株式会社バイオテックジャパン

所在地

▶ 新潟県阿賀野市勝屋字横道
下918-112

業種

▶ 製造業

プロジェクト体制

▶ 戦略構築：代表取締役社長江川氏

▶ 委員会型伴走支援

代表取締役社長江川氏
株式会社ブリッジにいがた 高橋氏、渡邊氏
新潟県工業技術総合研究所 大野氏、小林氏

業務フローの可視化
による業務の効率化

部署横断的な
アプリ開発

取り組んだ内容について教えてください

本プログラムでは、DX戦略の構築を行ったのち、「課題の抽出から対策の自走化」をテーマに掲げました。「委員会型伴走支援」では、DXのファーストステップとして、社内連携の強化とノーコードツールを活用した業務の効率化・合理化を推進し、成功事例の創出を目指し活動しました。

‘部署横断’の課題を可視化

各部署の業務課題や他部署への要望をアンケートし、関わる部門が多く改善効果が高そうな課題から取組を実施しました。課題について整理する過程で、業務の整理・可視化をし、不要な業務フローが明らかになり、業務のシンプル化に成功した。

単一部署のためではない 全社視点のシステム導入

社内全体の業務を俯瞰して見直した結果、個別最適化に陥らず、部署間の連携を意識した在庫表アプリの開発に成功しました。また品質保証の取組みとして、自社の従業員による、製品と外箱の印字が一致しているかの確認をするアプリや、ヒヤリハットについての報告をするアプリについて開発することができました。

X-DX Point

—トランスフォーメーションの為に

組織戦略

現場部門を中心に、全社の業務を俯瞰しながら部門間の連携を重視したDXを推進しています。現場主導の業務改善文化の醸成がされ、従業員が自ら課題を抽出し、改善策を提案・実行することで生産性が向上しました。単なるデジタルツールの導入ではなく、全社的な業務改革を目的に着手とし、全社横断のDX推進体制を整備。これにより、現場部門と経営層が一体となって課題解決に取り組む文化が形成され、現場職員が社内全体を俯瞰して自ら改善点を発見・提案する仕組みが確立されました。その結果、DX推進人材の育成や内製化体制が強化されるとともに、社内リソースによる継続的な改善サイクルが構築され、デジタル技術を活用した業務変革が着実に進展しています。

現場主導の業務改善文化の醸成と生産性向上

全社横断のDX推進体制の整備

内製化体制の強化と継続的改善サイクルの構築

社内連携を強化し、
合理化を進めるとともに、
新事業を創出する



<https://www.biotechjapan.co.jp/>

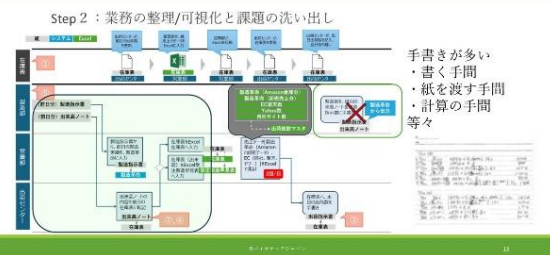
現場主導・経営一体化が、 全社自走の一步に

自ら挑戦する風土

当社では、現場主導の成功事例創出を重視し、DX委員会を設立。製造・営業・バックオフィスなど各部門から改善点を抽出し、業務フローの標準化やkintoneを活用したアプリ開発で具体化。これにより属人化の解消や情報共有、業務効率化が進みました。

「現場から考える」という姿勢を軸に、現場と経営が一体となることで、組織全体の変革を目指しています。また、本プログラムを通じて、経営層だけでなく従業員を巻き込むことで、主体的・自律的な行動が促されることを実感。生成AIに関するセミナーを自ら探して受講する社員も現れ、DXに対するマインドの醸成や、現場での情報収集・学習意欲の向上といった効果が見られました。

3-4.具体的な進捗/成果物



Message

現場と挑戦で変革する

今回の取り組みを通じて、DX推進には経営層だけでなく現場の巻き込みが不可欠だと実感しました。社員が自ら生成AIを学ぶ姿勢も生まれ、組織全体に前向きな変化が広がっています。これからDXに取り組む企業には、経営者自身がデジタルを理解し、現場とともに歩む姿勢を持つことをおすすめします。小さな一歩の積み重ねが、大きな変革につながります。

代表取締役社長
江川 穰 様



事業統括者からのコメント

同社は、アメーバ経営の導入により、現場ごとの最適化を進めておりました。同時に、各プロジェクトも任せきりではなく、社長がリーダーシップを発揮して推進する姿がDXにおいても反映されておりました。自ら先頭に立ってコミットする、社内の信頼があるから「こそ」の姿を是非参考ください。



業務DXからの組織力向上

Kurita
Niigata City

DX戦略書



DX推進事例



DX戦略書

▶ <https://ndxp.jp/case-studies/67d13a0f023c10c3a3877e48>

DX推進事例

▶ <https://ndxp.jp/case-studies/67d133b8023c10c3a37e5ccf>

社内ではDXを推進させたいと考えていたものの、具体的な進め方や実行に困っていた同社。1年前に社内委員会を立ち上げたものの、思うように進展がなく、全体的な相談や助言を求める場が必要だと感じたため、プログラムへの参加。
自社の長期ビジョンを達成できる組織の基盤を築くための活動を行った。

Transformation Points / 課題と方針

意識改革による組織改革

フラットで個人の自立意識とチームバランスが取れた組織を目指し、デジタル体制の再構築を行い、長期ビジョンを実現するための組織の基盤を築く。

組織改革による自己変革能力の獲得

経営課題と業務課題をリンクさせ、自ら改善、改革に向けたプロジェクトを立ち上げ、変化に対応できる組織を目指す。

DXビジョン

経営課題、 業務課題に立ち向かい 自己変革を続ける組織となる



▶ 株式会社栗田工務店

所在地

▶ 新潟県港南区亀田工業団地
3-1-16

業種

▶ 建設業

プロジェクト体制

▶ 戦略構築：代表取締役栗田氏

▶ 委員会型伴走支援

・ 木造業務業務
代表取締役栗田氏、社員4名
株式会社BSNアイネット 坂田氏
株式会社CONOC 佐戸氏、千賀氏

・ バックオフィス業務チーム
代表取締役栗田氏、社員4名
株式会社BSNアイネット 坂田氏
株式会社kubellストレージ 中氏、吉田氏

情報インフラ、情報資産 の言語化と分類

全社的なDXの視点 でのシステム導入

取り組んだ内容について教えてください

本プログラムでは「業務DXからの組織力向上」をテーマに掲げ、委員会型伴走支援により、業務システム/フローの見える化と情報資産の最適活用の取組みを実施することで、組織全体の生産性向上と、DXビジョンの実現に向けた体制強化を図りました。

情報インフラ、情報資産の言語化と分類

現行の業務フローを可視化し、情報インフラの視点からあるべき姿や対応の可否に関する情報を整理しました。また、セキュリティ対策への動機付けとして、業務フローに連動した情報資産の言語化と分類を実施し、その結果を基に改善活動を展開しました。

全社的なDXの視点でのシステム導入

担当者が委員会に参加したことで、全社DXの方向性を意識し、具体的なシステム導入に携わる中で、現場の視点を反映した運用体制が構築され、内製化と展開がスムーズに進みました。また、業務フローと組織体制の再検討により、コミュニケーションの強化や部署間連携が向上し、経営層と現場が協力してDXビジョンを共有した結果、システム導入が単なるツールの切り替えに留まらず、全社的な業務改革と組織変革に寄与する仕組みとなりました。



<https://www.bsnnet.co.jp/>



<https://conoc-dx.co.jp/>



<https://www.kubell-storage.com/>

X-DX Point

—トランスフォーメーションの為に

組織戦略

現場主導のDX推進を実現するために、DX委員会を中核とした全社横断型のプロジェクト体制を構築。経営層と現場の担当者が一体となり、課題の抽出から解決までを主体的に行う組織文化を醸成した。現場の実務に即した改善提案が活発化し、DX人材の育成と組織全体のデジタル活用能力の向上を実現している。

推進戦略

業務フローの可視化と情報資産の言語化により、業務の標準化と属人化の解消を推進。リモート環境やセキュリティ体制を整備し、現場とバックオフィスの連携を強化。DX委員会を通じて、システムの導入と運用を全社で共有し、定着を促進した。

気づきと実感

情報資産の可視化

自己変革できる組織へ

DXビジョンの実現へ向け、前に進むために組織の足元を固める



<https://kurita.net/>

異業種の事例から、新たな視点を獲得

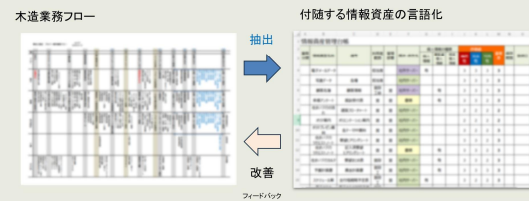
DXはITからだけではない

DXビジョンの策定と戦略・ロードマップ化を通じて、意識改革による組織変革に注力。DX委員会を中心とした全社横断の体制を構築し、経営層と現場が連携して課題解決に取り組む文化を醸成しました。業務フローの可視化や情報資産の言語化によって、業務の標準化と属人化の解消を図り、現場とバックオフィスの連携も強化。

現場発の改善提案が活発化し、全社的なDX推進の原動力となっています。本プログラムを通じて、現場の巻き込みがDX成功の鍵であることを再認識。異業種との交流により共通課題に気づき、他社事例から新たな視点を獲得。ツール導入だけでなく、現場の意識改革が全社変革の核であることを実感しました。

具体的な進捗/成果物

②業務フローに付随する情報資産の言語化と分類
情報の一元化と共有資産としての活用へ



Message

DXをどこから始めるか

DXはIT導入から始めるものと思われがちですが、実際には業務や組織文化の見直しが重要だと感じました。現場の意識や働き方を変えることが、デジタル化の土台となり、大きな成果につながります。また、異業種との交流を通じて、業界を超えた共通の課題や視点に気づけたことも大きな学びでした。柔軟な姿勢で、まずは足元から変えていくことが、DX成功の第一歩になると実感しています。

代表取締役社長
栗田 浩 様



事業統括者からのコメント

同社はIT資産の可視化に取り組みました。あらゆる社内資源を可視化し、方向性を整理する。それによりあらゆる現場をもつ社内状態の整理を可能に。他社との共同事業の現場での学びなど社内外の力を推進力に代えている好事例です！

社員参加型でDXを推進 プロジェクトをきっかけに組織風土を変革

Kotoriya
Niigata City

DX戦略書



DX推進事例



DX戦略書

▶ <https://ndxp.jp/case-studies/6760ed10f13d12b12e32c3d3>

DX推進事例

▶ <https://ndxp.jp/case-studies/67d12758023c10c3a369abcd>

これまでDXを思うように進めることができていなかった同社。どのように、何を進めるかがイメージできない状態から、社内を巻き込んだプロジェクトの推進体制を構築。全社的なフローの整理とあるべき姿を設定し、DXプロジェクトを経理DXを皮切りに推進。具体的なプロジェクトでの好事例の社内波及、風土の改革を行っていく。

Transformation Points / 課題と方針

魅力的な風土づくり

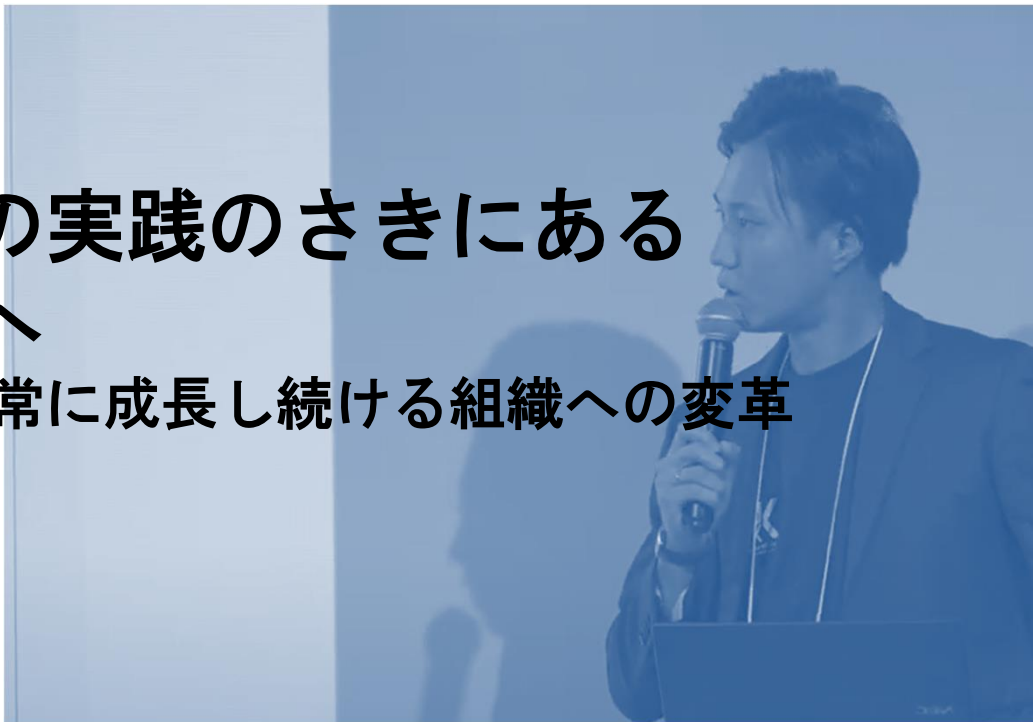
現場主導での課題の発見、整理、主体的な話し合い、改善提案までができる風土・文化が醸成されきっていない。部門間を超えた風通しを実現し、全社的なDX推進風土を醸成したい。

非効率を解消し創造的時間に変える

各部門の業務プロセスでの非効率を解消し、顧客、社員、自身と向き合う創造的な時間の確保。DXプロジェクトを経理DXを皮切りに推進していく。

DXビジョン

小さなDXの実践のさきにある 大きなDXへ 組織と事業が常に成長し続ける組織への変革



経理DXの推進による
生産性向上

小さなDXを推進
できる組織風土



▶ 株式会社ことりや

所在地

▶ 新潟県新潟市中央区3丁目4-36

業種

▶ 卸売業・小売業

プロジェクト体制

▶ 戦略構築：代表取締役社長梶原氏
社員から選出

▶ 委員会型伴走支援

・経理DX推進

代表取締役社長梶原氏/社員1名
株式会社THINKアドバイザー 山内氏

・組織風土

代表取締役社長梶原氏
株式会社あしたのチーム 北川氏

取り組んだ内容について教えてください

本プログラムでは、DX戦略のゼロからの構築を行ったのち、「小さなDX」と「大きなDX」をテーマに掲げました。プログラム後半の「委員会型伴走支援」を活用して、バックオフィス業務効率化、現場主導の業務改善と組織文化醸成にむけた体制を組成し活動を推進しました。

経理DXを皮切りとした 段階的・実行的DX

経理業務のDX推進および業務改善に着手し、経理業務プロセスの非効率を見直しました。業務全体を俯瞰し、プロセスごとの課題を可視化する「業務フロー俯瞰図」を作成。これにより、業務改善の優先度と着手すべきポイントを明確化した上でツールの導入計画を決めることができました。

現場主導の業務改善と 組織文化の醸成

経理業務の改善を起点に、「業務改善会議」を新設し、現場のメンバーが自ら課題を発見・整理し、主体的に改善提案を行う文化を醸成しました。このプロジェクトにより、経営層と現場間のコミュニケーションが促進されるとともに、部門間の風通しも良くなりました。現場発信による改善活動が活性化し、継続的な業務改善の基盤が構築されています。

X-DX Point

—トランスフォーメーションの為に

組織の成長

自発的に考えられる組織となる。成長できる環境が整っている。PDCAを回していける。社内横断的なコミュニケーションがシームレスにとれる。を目指したDX推進を行う。

経理DXを起点

業務改善会議による主体的な改善文化組成

小さなDXを重ね、大きなDXを

事業の成長

ことりや品質が担保されている。教育システムが整っている。誰でも一定基準のサービス提供ができる。新しいアイデアが生まれてくる状態になる。これらを事業の成長の姿と規定しDX推進を行う。

デジタル技術を最大限に活用して小さなDXで効率化を図り、社員一人ひとりに余裕を生むことで組織と事業が自発的に成長していき、強い組織になりたい。



https://www.kotoriya.co.jp/

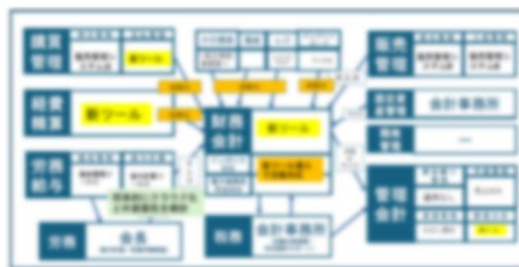
実感のある「小さなDX」が、社内の駆動力を生み出す

DXビフォー・アフターを可視化

プログラムを進める中で、DXの理解・戦略の構築を進めたうえで、個別に取り組むことで非常に効果を発揮することに気づきました。特に経理DXの取り組みが良かったと感じています。準備段階では想定していなかった、全体の俯瞰図を作成により、ビフォーアフターの比較が明確となり、全体的な道筋が見えるようになりました。

このように、具体的な変化を実感しながら進めることで、DX推進の方向性がより明確になった点が大きな気づきです。

経理関連業務 俯瞰図 <AFTER>



Message

跡継ぎの新たな一步に

後継者や新たな挑戦を検討している方にとって、DXの推進は有効な選択肢です。先代の方針を大切にしながら、次の一步を踏み出す手段として、どこから始めるべきか悩んでいる方にも適しています。DXの基礎を学びながら実践的に進められるため、会社を次のステージへ導きたいと考える跡継ぎにとって、大きな支えとなるはずで

代表取締役社長
梶原 圭一郎 様



事業統括者からのコメント

全国型の事業者が市場拡大を行うなか、同社は地域に根付いたからこそできる事業体を強味としています。大手企業では提供できない、顧客との信頼関係、顧客のニーズをくみとれる体制、これらの「ことりや品質」を次のステージにしていけるための着実なDX推進の姿。是非参考ください！

世界に届けるためのDX推進基盤

THREE PEAKS GIKEN
Sanjo City

DX戦略書



DX推進事例



DX戦略書

▶ <https://ndxp.jp/case-studies/6760ed22f13d12b12e32e33d>

DX推進事例

▶ <https://ndxp.jp/case-studies/67da78219b97427ebc2dd0f0>

社内でDXやデジタル化に対する課題意識があり、特に生産部門で日報の電子化を進めようと考えいた同社。データを利活用できていないことに気づき、作業日報の電子化を進めたいと考え、プログラムへ参加。各部門ごとの課題を抽出し、自社のビジョンを達成するための基盤を築く活動を行った。

Transformation Points / 課題と方針

営業(ブランディング/PR)

自社ブランドを世界に広く深く届けるにあたり、自社のブランド価値を知り、WebやSNS等のPR方法を設計する必要がある。PR施策の検討、それらを社内での内製化にむけた人材育成を行う必要がある。

製造(生産性の把握と向上)

生産性の把握及び製造のプロセスがデータ化されていない状態であった。作業日報から電子化を行い、生産工程の進捗やリードタイムを把握する。

DXビジョン

ブランドを
世界に広く届ける。
技術力を強化し、生産性の品質を高め
続ける。社内コミュニケーションを活
性化し、PDCAを回せる体制を作る



▶ 株式会社スリーピークス技研

所在地

▶ 新潟県三条市塚野目2171

業種

▶ 製造業

プロジェクト体制

▶ 戦略構築：代表取締役社長 小山氏

▶ 委員会型伴走支援

・営業部門チーム

代表取締役社長小山氏、社員2名

株式会社EIGHTS 大橋氏、市岡氏

合同会社RJ'sリサーチ・アンド・アドバイザー 伊藤氏

・製造部門チーム

代表取締役社長小山氏、社員2名

株式会社Academix 腰越氏、井口氏

自社ブランド価値の
定量把握

ノーコードにより
自社で開発できる体制

取り組んだ内容について教えてください

本プログラムでは、自社のビジョンを実現するためのDXビジョンを掲げ、営業部門と製造部門に分けて委員会型伴走支援を実施しました。

自社のブランド価値を把握しデジタルマーケティング戦略の立案

新潟大学の研究室のノウハウを用いて、自社ブランドの価値の調査を実施しました。調査した内容を分析した上で、目標設定し、SNSでの発信方法の検討を実施しました。SNSでの発信については、ショート動画を作成し発信をすることにしました。本委員会の活動の中で、当社の社員と、アドバイザー企業とで、ショート動画の企画作成、撮影、編集の一連の作業に取り組みました。

社内で開発できる一歩

製造部門では、委員会活動を通し、現場日誌のデジタル化に取り組みました。

ノーコード活用のアドバイザー伴走の元、Google スプレッドシートを活用し、作業日報のデジタル化を実施しました。更に、デジタル化をベースとした生産データの分析にも着手。Looker Studioを活用した、データの可視化及び利活用できる環境構築に取り組みました。

X-DX Point

トランスフォーメーションの為に

事業戦略

部門ごとにDXビジョンを掲げ、X(トランスフォーメーション)を推進するためのデジタル技術を活用し、社員を巻き込んだ推進を実施。

部門ごとのDXビジョン・戦略の構築

部門ごとに委員会を構築しDX推進へ

部門内でデジタル人材の育成

組織戦略

外部パートナーとの連携を通じて、デジタル技術に関するスキルやノウハウを習得し、持続的にDXを推進できる体制を構築。さらに、社内では生成AIを活用し、業務に必要なデジタルツールを自社で内製化できる仕組みを整備。これにより、現場の課題に即した柔軟な改善活動を実現。

DX戦略を実行し、DXビジョン、 企業理念を実現する。



<https://www.3peaks.co.jp/>

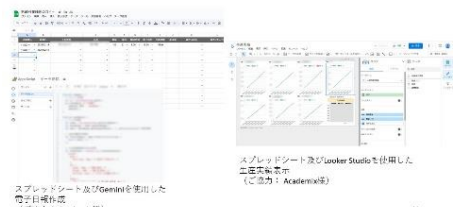
従業員を巻き込んだ DX戦略の策定の重要性

経営層と現場の認識の一体化

現場＝従業員を起点に戦略や取り組みを進めていくことが重要だと実感しました。これまで経営者中心で進めていた取り組みも、担当者を任命し、従業員を巻き込むことで現場に根付く形へと変化しました。戦略の策定プロセスにおいても、

従業員と共に考え、作り上げることで、現場との意識のズレがなくなり、認識の一体化に繋がりました。その結果、より実効性の高い戦略が構築され、社内コミュニケーションの質も向上しました。現場を起点に考え、動くことこそが、持続可能なDX推進の基盤になると強く感じています。

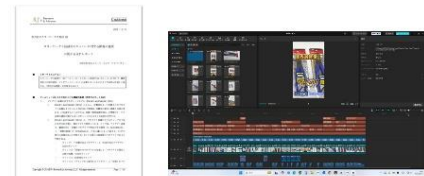
生産管理チーム



スプレッドシート及びGenAIを使用した電子日報作成

スプレッドシート及びLooker Studioを使用した生産実績分析 (ご協力: Academix様)

DXマーケティングチーム



アカウントによる顧客分析 (ご協力: 3ピークス・アンド・アドバイザー様)

CapCutを使用したシート動画編集 (ご協力: EIGHTS様)

Message

従業員を巻き込んだ推進を

DXに取り組むには、経営者の意志だけでなく、実働を担う担当者との連携が欠かせません。一人で進めようとせず、現場に権限を委ねながら、経営と現場が一体となる体制づくりが重要です。会社全体を巻き込み、任せる力と巻き込む力のバランスを意識することが、トランスフォーメーション成功の鍵だと感じています。

代表取締役社長
小山 公一様



事業統括者からのコメント

同社の製品は世界へ広がっており、世界の市場の成長とともに成長する企業です。視覚化、定量化しづらい「ブランド」を大学との連携により可視化することで、海外顧客の反応を定量的に把握しPDCAを回せる体制となりました。産学連携をDXの一步にかえる姿を是非ご参考ください！

QCサークルを起点とした、 ボトムアップ型のDX推進

Mizushima Tekko —
— Agano City

DX戦略書



DX推進事例



DX戦略書

▶ <https://ndxp.jp/case-studies/675aa125a74f5df969804294>

DX推進事例

▶ <https://ndxp.jp/case-studies/67d1266f023c10c3a3686957>

昨年会長が代表取締役を退任し、社長ひとりで会社を率いていくようになり、若手社員と経営層との距離感を縮め、一体感のある組織をつくりたいと考えていた同社。40年にわたり実施しているQCサークルによる改善活動を起点とした、社員主導のDX推進を行った。

Transformation Points / 課題と方針

QCサークルにデジタルを取り入れたQXサークル

長年の業務の中で複雑化・形骸化していた業務を見直し、本来不要であるかもしれない作業の洗い出しと改善に取り組みました。従来のQC活動を土台に、そこから生まれた改善アイデアをデジタル技術で具体化する「QXサークル」を導入。現場主導の改善活動を通じて、組織内にデジタル思考を広げ、業務改革の第一歩としました。

DXビジョン

百年絡んだ糸をほぐして シンプル工場へ 誰もがいつまでの居られる場所づくり ～重労働との決別～



QC→QXへの
トランスフォーメーション

デジタル技術を活用した
改善活動へ

水島鉄工株式会社

▶ 水島鉄工株式会社

所在地

▶ 新潟県阿賀野市京ヶ瀬工業
団地3610-155

業種

▶ 製造業

プロジェクト体制

▶ 戦略構築：代表取締役社長 南様

▶ 委員会型伴走支援

- ・技術サークル
技術サークル3チーム
株式会社BSNアイネット 坂田氏
株式会社Academix 腰越氏、井口氏
新潟県工業技術総合研究所 小林氏、大野氏
- 事務サークル
・事務サークル1チーム
株式会社BSNアイネット 坂田氏
株式会社Academix 腰越氏、井口氏
新潟県工業技術総合研究所 小林氏、大野氏

取り組んだ内容について教えてください

本プログラムでは、DX戦略の再構築を行ったのち、「QCサークルからのQXサークルへのTransformation」をテーマに掲げ委員会活動を実施しました。委員会型伴走支援では、「QX委員会技術サークル」「QX委員会事務サークル」に分けて活動行いました。

QXサークル活動

当社では、QC活動にデジタル技術を掛け合わせた「QXサークル」として改善活動を展開しました。技術サークル3チーム、営業事務サークル1チームを編成し、それぞれが「改善項目×デジタル技術」をテーマに設定。現場主導での課題抽出と実行に取り組みました。

技術サークルでは、職人が生成AIに初めて触れながら、日々の業務改善にどう活かせるかを試行錯誤。営業事務サークルでは、既存の情報資産をもとに業務フローを整理し、効率化の余地がある業務に対して、生成AIを活用してExcelマクロやVBAコードの作成・テストを行うなど、実務に直結した改善に取り組みました。

X-DX Point

—トランスフォーメーションの為に

事業戦略

40年間活動しているQCサークルは自社の成長の原動力になっている。デジタル技術で具現化し、会社全体にデジタル伝播することにより、属人化され聖域化された職人技の再検証、デジタル技術によって内包するムダを排除、標準化していく。

企業文化であるQCサークルを起点としたDX推進

改善活動にデジタルを組み込む

全社でのDXの機運を醸成し、企業文化へ昇華させる

組織戦略

第一歩として、QCサークルの進め方に生成AIなどのデジタルツールを取り入れる勉強会を実施。現場従業員が自ら学び、身につけた知識をもとに、各サークルは自走して活動を展開。省人化や属人化していた工程、職人技に依存していた作業に対し、具体的なデジタル改善を進めることで、現場主導の組織的な変革につなげています。

QC(改善活動)+DX=QX デジタル改善の自走システムで トランスフォーム



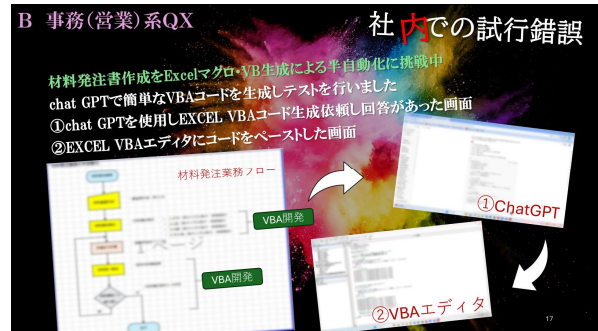
<http://www.mizu-tk.co.jp/>

鉄工所らしくない鉄工所へ

デジタルを使う ‘職人2.0’に！

DXの方針や思いを経営者が明確に示し、それを社員と共有して進めることで、社内の雰囲気や姿勢が大きく変わることを実感しました。これまで指示待ちだった若手社員たちが、自ら意見やアイデアを出し、主体的に関わるようになったことは大きな変化です。

また、他の企業も同じように悩みながら進んでいる様子を見たことで、自社だけの問題ではないと気づき、前向きに取り組むきっかけになりました。



Message

QXサークルが事業成長へ

DX推進をしていく初めの一歩として、職人と生成AIは意外と相性が良いことに気が付きました。普段はプライドが邪魔して他人に聞きにくいことでも、生成AIを通じて気軽に相談できるためです。職人が多い企業ほど、DX推進における変化や効果を実感しやすいと思います。

代表取締役社長
南 秀樹 様



事業統括者からのコメント

同社の強さはこれまで長年運営されていた「QCサークル」という活動にありました。100を超えるステークホルダーの前で、社内改善を発信する場により現場の改善が進められていた力を、今回DXに広がる構造となりました。既に社内にある「推進力」をうまく活用し、DXに広がる好事例としてご参考ください！

